

2012 年

Bishop ボルダリングツアー

報告書

信州大学山岳会

## 目次

はじめに  
全成果一覧  
行動記録  
会計報告  
おわりに

## 日程

2月9日 出国  
2月10日 移動日 Los Angeles から5時間で Bishop に到着  
2月11日～3月8日  
Bishop 近郊でのボルダリング  
3月9日 移動日 Los Angeles へ戻り、日本へ  
3月10日 帰国

## メンバー

中嶋渉（会2）・笠原大輔（部外者）・福田宗次郎（部外者）

## はじめに

このツアーの誘いをもたらしたのは、昨年6月に行われた国民体育大会・山岳競技の長野県代表選考会的时候了。共にその大会に参加したクライミング仲間の笠原大輔さんから、競技が終わった後に「来年の2月に Bishop に行くけど、渉、行く？」と言われました。ずっと海外でのクライミングに憧れていた僕としては願ってもない話で、春休みの予定の確認もせず、いつから休みになるのかだけ調べて「行きます！」と返事をして、手帳のカレンダーの2月9日（春休み初日）から3月10日まで『Bishop!!!』と大きく印を付けました。

当初は滋賀県の大学生・上村正幸さんと笠原さん、自分の3人で行く計画をたてていましたが、上村さんの都合が合わず、一時メンバーが笠原さんと自分の2人だけに。レンタカーやガス代のことを考えると人数は3、4人の方が都合がよく、改めて知り合いのクライマーに声をかけたところ、愛知県の大学生・福田宗次郎君と一緒にいくことになりました。

先日ある機会に、今年度入部した1年生相手に自分の会での活動について話したことがありました。すると、そのうちの一人に「異端児ですね」と言われました。確かにそうです。御存じの方も多いと思いますが、僕は合宿のとき以外、ほとんど登攀系の山行しかせず、あとはずっとフリークライミングばかりやっています。ましてや今回のこのツアーなど、ボルダリングという、フリークライミングの中でも山から最も遠いジャンルのもので行おうというものでした。

「異端児」による、異端すぎるにもほどがあるこの計画に対し、OBの皆様より多大なご支援を、そして「信州大学学士山岳会小川勝山岳基金」を適用していただき、資金面だけでなく気持ちの面でも大変助かりました。OB会の深い理解と愛情に感謝、感謝です。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

## 成果一覧 (V10以上)

The Mandala (V12) Buttermilks  
Kill On Sight (V12) Happy Boulders  
The Aquarium (V12) Sad Boulders  
Ambrosia (V11) Buttermilks  
Xavier's Roof (V11) Buttermilks  
Standing Kill Order (V11) Happy Boulders  
Dance the Night Away (V11) Happy Boulders  
Shizaam sit (V11) Sad Boulders  
Beefy Gecko (V11) Sad Boulders  
This Side of Paradise (V10) Buttermilks  
One Mule Wonder (V10) Buttermilks  
Return Jedi (V10) Buttermilks  
Acid Wash (V10) Happy Boulders  
Beef Cake (V10) Sad Boulders  
Aquatic Hitchhiker (V10) Sad Boulders  
Bubba Escapes the Ward (V10) Sad Boulders

## 行動記録

### <旅のはじまり>

2月8日。後期最後の試験を終え、ガッシャーとボルダリングマットを担いで長野市のアパートを出る。なんとなくがらんとした殺風景になる8畳間。全てのコンセントを引っこ抜き、ガスの元栓も確認して、誰に言うでもなく「いってきます」と口に出した。

電車で松本に帰り、一度実家に顔を出した後、島内にある笠原さんのアパートに行く。翌日からの旅を思うと、気分は遠足前夜の小学生だった。

翌朝、中央タクシーの空港便で成田空港へ。このタクシーは、予約の際にフライトの時間を知らせておくのとそれに間に合う時間に自宅まで迎えに来てくれる。大変便利で快適だった。成田で名古屋から飛行機できた福ちゃん（福田君）と合流し、程なくして搭乗。日本を離れ、9時間かけて太平洋を飛び越えた。

ロサンゼルスに着いたのは2月10日の朝。レンタカー屋で車を受け取り、荷物を積み込みにかかる。ボルダリングマット3枚と大きなザック3つ、そこにそれぞれの手荷物を押し込み、なんとか収まった。レンタカー屋のお兄さんは苦笑い。後部座席に収まった福ちゃんは半分荷物に埋もれていた。

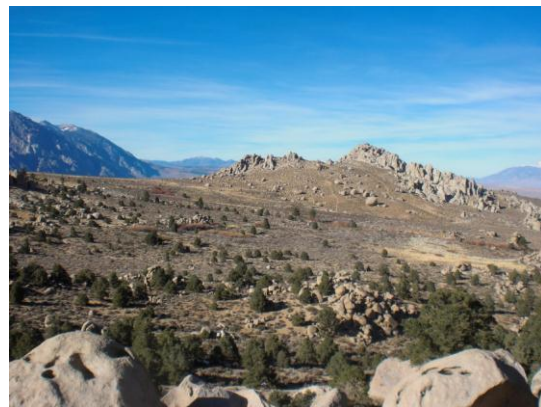
目的地の Bishop はロサンゼルスの北東約500キロ、シエラネバダ山脈の麓に位置し、ここまで5時間のドライブ。ロスの市街を抜けてしまえば、目に入るのは日本ではまずあり得ない広大な荒野と、その中を真っすぐに走るハイウェイ。この景色に、僕は既に興奮していた。

Bishop の町に着いたのは日が沈んだ頃で、Wilson's Eastside Sports（アウトドアショップ）と VONS（大型スーパー）で買い出しをしてから Pit（クライマー用のキャンプ場）に向かう。町から出ると街灯は疎らで辺りは真っ暗。おかげで道に迷ってしまい、やっと Pit に辿りついたのは21時過ぎだった。

### <岩場紹介>

Bishop の町は山に囲まれた盆地にあり、その近郊にはフリークライミングの岩場が沢山ある。そのうち Buttermilks、Happy Boulders、Sad Boulders が有名で、今回はこの三カ所でボルダリングを行った。

Buttermilks は町の南西、Mt. Tom の麓にある花崗岩の岩場。標高は約2000メートルある。低い丘のような岩山がいくつもあり、その周りにジャガイモのように丸っこい形の巨岩がごろごろと転がっている。岩は硬く、大きく、そして美しい。目の前には4000メートル級の山々が聳え、なんとも贅沢なロケーションでのクライミングが楽しめ



る。有名な課題が多くあり、メンバーそれぞれの目標となる課題も **Buttermilks** に集中していたので、今ツアーの登攀日の半分はここで登っていた。

**Happy Boulders** と **Sad Boulders** は町の北に横たわる溶岩台地の谷にある岩場。狭い谷の中に奇妙な形をした溶岩が点在する。多彩、かつ複雑な形状の岩たちは、ヨーロッパにありそうな彫刻を思わせる。ここの岩は肌触りがなめらかで、指先の皮がなくて痛むときにはこちらにくるようにしていた。



### <The Mandala (マンダラ) >

**Buttermilks** は二つ並んだ大きな岩山からなり、大きく分けて5つのエリアがある。その中で最も大きい **Buttermilk main** が一番手前にあり、ツアーの大半はここで登っていた。

美しい巨岩が点在するこの **Buttermilk main** で、ひと際存在感を放っている岩がある。**Mandala Boulder** と名付けられたその岩には、船の舳先のように大きく張り出したオーバーハングがあり、そのオーバーハングを真っすぐ登る課題がある。これが世界のクライマーの間で最も有名な課題、**The Mandala**。グレードは **V12**、日本のグレードでは四段に相当する。



**The Mandala** 全景 影になっている部分の右端を登る

笠原さんはこのツアーでの目標をこの **The Mandala** に定め、「絶対登る！」と意気込んでいたが、僕の方はあまりトライするつもりがなかった。ツアーの最終目標を別の課題に決めていて、それが登れるまでは他に手を出しすぎないと決めていたこともあったが、大きな理由はまた別にあった。この課題は、とにかく指に掛る負担が大きいのだ。ホールドは小さく、しかも鋭く、「1日に数回しかトラ

イ出来ない」という話も聞いていた。インターネットや DVD など様々なメディアでこの課題について目にする何度かことがあったが、極端に小さいホールドや、それで指を裂いて流血しているクライマーの様子が取りあげられていて、あまり自分に向いているとは思えなかったのだ。もともと僕は指の力がある方ではなく、カチiiiは苦手だった。そのためイメージばかりが先行し、「どうせ、もろに苦手系だろう」と決めつけていたのだ。

2月16日。夕方になり、気温が下がってきた頃に、笠原さんが「やるよ」と言って **Mandala Boulder** に向かっていった。僕もトライしていた課題に一旦見切りをつけてそちらに向かった。

この課題は最初の1手が最大の核心だ。ホールドが複数あって、やり方も幾通りかある。笠原さんがその全てを試しているのを見ていて、自分もトライしてみたくなってきた。いくら「苦手系だろう」と思っている、結局クライマーとはそういう生き物で、そこに岩が在って、そして誰かが登っている姿を目の前にすると、自分もやってみたくなくなってしまう。木を目の前にした子どもが、それに登りたくなくなってしまうのと同じだ。それにこの岩は、この課題は、世界のここにしかない。今やらなくて、いつやるのだろうか？そんな気持ちになり、僕はシューズとチョークバッグivを手を取った。

「折角だし、記念受験しておくか！」

そう言って取り付いた1回目。いろいろ考えた挙句、最初の1手は一切の中継を入れず、遙か頭上の鋭いカチを右手で狙うことにした。スタートのホールドを持って体を上げ、思い切り真上に右手を出す。すると、右手がカチの淵に触った。結局そのカチは捕らえられずに落ちたものの、感触は自分でも驚くくらいに良かった。

「出来るかもしれない」

頭の中の信号が「苦手系だろう」から一瞬で切り替わる。「おおっ？」という感嘆の言葉ももらしながら後ろを振り返ると、笠原さんも驚いていた。「すげー、届くじゃん」自分の体が、一段上のギアで動き始めた感じだった。

その後数回で、この1手目を捕らえた。そのままスタートのホールドまで一気に足を上げ、左手を右手のすぐ脇に添える。そして3手目がまた遠い。右手で右上の方にある掛りのいいカチに飛びつく。最終的に、この日は3手目を捕らえるところまで進んで日没、時間切れとなった。

キャンプ場へ帰る車の中で、僕は数時間前までの自分が馬鹿らしく思えて仕方なかった。**The Mandala** を苦手系だと決めつけて、トライしようとすらしていなかった自分を笑った。「やってみないと分からない」の一言に尽きる。先立つ数カ月、ツアーで成果を上げるためにトレーニングした成果も感じていた。僕の体は良い意味で、僕の予想を覆してくれた。「いいなー、渉くん。正直、ジェラス（嫉妬）だなー」この日1手目を捕らえられなかった笠原さんの声を隣に聞きながら、僕は密かにニヤリとしていた。





3日後、2月19日。天気は快晴で気温は低め。そよ風が吹くボルダリング日和だ。前日、知り合いが泊まっているモーテルにお邪魔して吐くまで飲んだために、二日酔いがなにか少し心配だった。とりあえず、モンスター（アメリカでは有名なエナジードリンク）を一缶飲んでいざ Buttermilks へ。

ウォームアップを済ませ、まだ日が当たらない The Mandala に向かう。指に汗をかかず、かといって悴みもしない、丁度いいコンディションだった。

「今日、暑くなってくる前に登ってしまおう」

そう決めて上着を脱ぎ、シューズを履いた。手にチョークを付けて、パンパンと叩くと、炭酸マグネシウムの粉が日差しの中を煙のように舞う。集中が高まり、呼吸は落ち着く。この瞬間が好きだ。

1回目、2回目は1手目を外して落ちた。3回目で1手目を捕らえ、3手目まで進む。左足を高い位置まで上げ、左手を小さなカチで中継して遥か左上のフレークへ飛ばす。しかし十分に勢いをつけられず、僕の左手は空を搔いた。そのまま地面まで落ちる。「このトライで登ってやる」と気合を入れていた分、悔しかった。悲鳴のような雄叫び上げ、頭を抱える。まだ時間はあったが、気持ちが焦ってくる。

切り替えて臨んだ4回目は3手目を捕らえ損ねて落ちた。また気持ちが焦り始める。

「これでもう1手目が出来なくなったらどうしよう」

そんな弱気な考えも浮かんでくる。しかし、気持ちも集中もまだ切れていなかった。

5回目。1手目を捕らえ、左手を添える2手目で足が滑った。一瞬足ブラになる。

「これで終わらせるんだ！」

その思いで、必死にホールドを握って耐えた。足を壁に戻し、3手目。どこかでスイッチが

入ったのか、いつもよりも楽にカチを捕らえた。右手に力を込めると、人差し指の爪が壁を引っ掻き反り返る感触があった。しかし、全く気にならない。僕の頭にあったのは、ただこの課題に登りきりたいという衝動のようなものだけだった。3回目に落ちた1手に差し掛かる。つま先でしっかりとスタンスを捕らえていることを確認して、叫びながら左手を出した。届いた。薄いフレークを思い切り握り込んで、右手を添える。ここまでくれば、もうあとは易しい。リップを取ってマントル。岩の頂上まで一気に駆け上がった。

近くの岩で登っていたクライマーたちがこちらを見て手を振っている。それに応えながら、この課題に苦手意識ばかりもっていた自分が、改めて馬鹿らしく思えた。そんな馬鹿らしい自分は、ガッツポーズして叫んだ声と共にどこかへ行ってしまった。限界を押し上げた快感に酔いながら、岩の上にごろりと寝転がる。空は抜けるように青かった。

#### <Ambrosia (アンブロージア)>

Bishopに行くことが決まった後、何を目標にするか考えた。高難度の課題を狙うか、上質な面白い課題を登って回るか……。そうして考えを巡らせて、ハイボルダー<sup>vi</sup>に考えが及ぶのにそう時間はかからなかった。僕はその以前から危険を伴うトラッドクライミング<sup>vii</sup>に興味があり、「リスクを負ってこそクライミングは面白い」とまで感じるようになっていたので、Buttermilksにある半分フリーソロのような桁外れのハイボルダーは、そんな僕に丁度よかった。



ロープを背負い、北面のスラブを登る Ambrosia は手前の茶色い壁の黒い筋の左わきを登る

さて、では具体的にどの課題を狙っていくか。そこで Ambrosia に思い至った。2007年にアメリカの Kevin Jorgeson が初登した、Buttermilks で最も高いハイボルダーだ。高さ



は 15 メートル。ボルトを撃たずに登る方がおかしいくらいの高さだ。当然、上の方で落ちることは許されない。

Bishop に着いた日の翌日。僕らは早速 Buttermilks を目指した。町から 20 分、エリアに続くダートを走っていくと、Ambrosia のある Grandpa Peabody が丘の向こうに姿を現した。

車を停めて、小走りで Grandpa Peabody を見に行く。ボルダーというよりも山に在る壁を見上げているような感じだった。Ambrosia はこの岩のもっとも長く高さのあるフェースに 1 本だけ引かれた美しいラインで、僕は一目見て「やろう」と決めた。実物を見るまで、僕にはまだ迷いがあった。15 メートルのうち前半の 7 メートルが核心なのだが、後半は心的負担が半端ではないだろうし、後半だけでも十分に難しい (5.13a<sup>viii</sup>くらい) と聞いていたため、自分の実力でそれが克服できるのか正直不安だったのだ。しかし、実際に課題を目の前にして、「なんとかかなりそうだ」と感じた。根拠はない。だが、僕が想像して若干怖じ気づいていたよりも、この課題はもう少し低く見えたのだ。

初日のクライミングを終えた僕は、町に戻ってから Wilson's でロープを買った。

Ambrosia へのトライを始めたのは 2 月 14 日。そう言えばバレンタインデーだった。アップを済ませ、高さのある易しい課題をいくつか登って Grandpa Peabody に移動。改めて、15 メートルの茶色い壁を見上げる。岩の上にボルトが打ってあることは分かっていたので、そこからロープを垂らし、オートロックのビレイ器で懸垂下降して、ムーヴを練習してから登ることにした。

この岩は荒野の真ん中にごろんと転がっており、それに加えてこの大きさなので、岩の上に上がるのが容易ではない。北面の易しいスラブ (5.8 くらい) を登り、下りもそのルートをクライムダウンするのが一般的だ。60 メートルのシングルロープを背負い、恐る恐るそのスラブに取り付いた。幸いホールドもスタンスも明瞭で、快適なスラブだった。以後、Ambrosia を登るまで、このスラブを何度となく登り降りすることになる。

Grandpa の上に立ち、支点を確認する。Ambrosia の抜け口に少々古びたボルトが二本、並んで打ってある。(後でガイドブックを読んで知ったのだが、Ambrosia はもともとトップロープ<sup>ix</sup>でトライされていた課題だったのだという。) そのボルトにヌンチャクを掛け、ロープを垂らしてフィックスし、懸垂下降してホールドを探った。

この日は後半部分のホールドをブラシでクリーニングし、大まかにムーヴを組み立ててみるだけで終わりにした。ロープを回収して巻き、また背負ってスラブをクライムダウンして地面に戻る。この壁は 120 度くらい前傾しているので、上から懸垂下降すると壁から離れてしまい、途中で手が届かなくなってしまう。そのため、前半部分は下からボルダーとして、つまりロープ無しでトライするしかない。ということで、取り付きにマットを敷

き、前半部分にもトライした。

出だしの部分でいきなり躓いた。小さく鋭いホールドを持って、大きなムーヴで登るのだが、疲れているのか、指が痛くて仕方ない。ムーヴもひとつひとつ難しくなかなか解決しない。ひとりで「ああでもない、こうでもない」と首を傾げていると、どこからともなく外人がひとりやってきた。

「Is this Ambrosia?»

「Yes.」

「Cool. すげえな。お前、これ登るつもりか？」

「Of course. そのつもりだよ」

「Oh! Crazy! Sick!」

それから彼は、「これはどうだ?」「こうしたらどうだ?」とあれこれムーヴ<sup>x</sup>を提案してくれた。おかげで出だしの部分はどうにか解決して、疲れていなければこなせそうになった。

「I'm Josh. 友だちとカナダから来たんだ」

帰りがけに彼はそう言って、手を差し出してきた。

「I'm Wataru Nakajima. 日本から来た」

がっしりと握手して、僕も自己紹介しておいた。

Josh はカナダ人のプロクライマーで、仲間たちと 2 月から 3 月の終わりまで Bishop に滞在していた。これを機会に彼と仲良くなり、その後何回も一緒に登ったし、今でも交流がある。

それから Buttermilks に行った日は必ず Ambrosia にトライした。後半部分は思ったよりも易しく、ムーヴはすぐに解決した。問題は前半部分だった。毎回少しずつ進展してはいたが、一番の核心になる部分の最初の一手がなかなか止まらなかった。右手の掛りの悪いエッジから、飛びつくようなムーヴで左手を遥か上にあるエッジに出す。このエッジは、掛りはいいものの幅が指三本分しかなく、狙い難い。4 日目になって漸くそれらしいムーヴが見つかった。それが止まれば核心はあと二手。そこからは比較的易しいが絶対に落ちられない後半部分に突入する。核心の終わりで約 7 メートル。それよりも上で落ちたらただでは済まないだろう。

2 月 25 日。トライ 5 日目。冬場は気候が穏やかな Bishop は、この日も晴れだった。キャンプ場を出る時、笠原さんと福ちゃんに

「今日は一日 Ambrosia に費やすよ。狙ってみる」

と告げた。

岩場に着いて、アップを済ませる。僕はいつも登る前にラジオ体操をするのだが、この日は念入りに第二体操までやった。体が解れたところで、また毎度のようにロープを背負って 5.8 のスラブを登り、Grandpa Peabody の上に立つ。気持ちは既に Ambrosia を完登することに向いていて、「これで最後にしよう」と考えながらロープを張った。後半部分の

感触は悪くなかった。何度も繰り返し練習したおかげで、ムーヴにはもう無駄がほとんどなかった。ホールドが欠けたりしなければ落ちることはないだろう。が、ここで最上部のムーヴが定まっていないことを思い出した。課題の最上部、抜け口の部分に大きなガバがあり、それを掴めば課題はほとんど終わりだった。しかしそこからもう何手かあって、岩の上に這い上がらなければならない。易しいが、不安な要素は少しでもなくしておきたかった。ガバからの一連の動きを何度も、何通りも試してみるが、どれもしっくりこない。結局いくつも試したうちで一番感触が良かった左足のハイステップで抜けることに決め、身体に覚え込ませるように練習した。それから後半部分をもう何回か練習し、ロープを岩の上に巻き上げて練習を終わりにした。

Bishop は冬でも天気がいいと日中の気温が 20 度近くまで上がる。Ambrosia があるのは岩の東面だが、若干南を向いているので午後になってもまだ日が当たる。直射日光で熱された岩肌は、指先を酷使するクライミングには向かない。指が汗ばみ、感触が悪くなる。Ambrosia が陰になる時間を、ゆっくり待った。

日が暮れ始めた。時間だ。戻ってきた笠原さんと福ちゃんに「そろそろやるよ」と声をかけて、Ambrosia の下にマットを敷きつめる。と言っても、4 枚しかない。15 メートルのこの課題を前にすると、あまりに少なく小さい。このボルダーの前では、あまりに小さい。本当なら、近くの岩で登っているクライマーを呼んできてマットを借りたかったのだが、この日の Buttermilks はいつもよりも空いていたし、この時の僕はもう、そんなことはどうでもよくなっていた。マットの見た目よりも、「落ちたらヤバイ」という考えの方がもっと小さかった。

1 回目は問題の一手で落ち、2 回目はそれよりも数手下でミスして落ちた。そして、3 回目で問題の一手が初めて止まった。しかし気持ちが焦っていた。右手を左手のすぐ横の幅の広いピンチに上げ、足下も定まらないまま遥か上にあるホールドに左手を出したものの、その一手は空を切った。捨て身で手を出して落ちてきた僕を受け止めた笠原さんが、衝撃で後ろに吹っ飛ぶ。やはり高い。しかしそれは気にならなかった。マットの上に転げて立ち上がった僕は、笑っていた。このとき僕にあったのは高さへの恐れではなくて、この課題に登れるか登れないかというスリリングな駆け引きだった。4 回目はムーヴを考え直し、右手のピンチを取った後、左手を 50 センチほど左にある縦カチを中継してから出してみた。止まらなかったが、左手は次のホールドに届いていた。この一手を止めれば、核心は終わる。

1 回トライするごとに鋭いカチを握る痛みは増してくるし、体もヨレてくる。

「長めにレストして、その次で最後にする」

二人にそう言った。WALKMAN で音楽を聴きながら岩場を散歩し、帰ってきてから Ambrosia の下にある岩にもたれかかって昼寝した。

福ちゃんの足音で昼寝から目覚め、シューズの紐を確かめるように締めて 5 回目。出だ

しからムーヴが完璧に決まらない。スタンスに上手く乗れていないのか、大きな一手をこなす度に片足ずつぷらん、ぷらんと外れる。右手カチからの一手でも左足が切れて空を掻いた。しかし不思議と気持ちは落ち着いていた。左手を持ち直し、右手をピンチに寄せ、左手を中継のカチに送る。そして核心の最後の一手。大きく息を吐いて、思い切り出した。予想通り、リーチ一杯で止まった。下で笠原さんが福ちゃんに何か言って慌ただしくマットを移動させる音がする。

核心が終わった所に洗面器サイズの掛りのいいフエコ<sup>xiii</sup>があり、そこでレストしてから後半部分に突入する。ここにきて、指が痺んでいることに気づいた。ゆっくりと大きく息をして、指の感覚が戻るのを待つ。感覚はなかなか戻らず、1分くらいレストした。頭の中に落ちるイメージは少しもなく、次にこなすべきパートに集中していた。

覚悟を決める。ここからは何度もリハーサルしたパートだが、一手一手遠くて嫌な感じだ。ここからはグレードにすると 5.12 で、前半に比べればさほど難しくない。しかし最初の数手をこなしたところで、今度は体の疲れが顔を出し始めた。引きつけが甘くなり、肩に無駄に力が入って動きが硬くなり、一気にパンプ<sup>xiii</sup>してくる。

課題の 3 分の 2 が終わり、左手がレストポイントのガバ<sup>xiv</sup>を掴む。思った以上にパンプしている。しかもここで集中が切れてきて、雑念が入りこんでくる。

「駄目だ、パンプが抜けない」「落ち着け。何度もリハーサルしたムーヴだ」

「笠原さんに頼んで、上にあるロープを垂らしてもらおうか？」

「ふざけるな。ビビったら終わるぞ」

そう思いつつ、ちらりと下を見る。言わずもがな、地面は遥か下だ。マットが切手くらいの大きさに見える。ここまで来てしまった以上、もう選択の余地はない。選択する余裕すら、ない。



上のレストポイント ここが一番精神的に辛かった

1分くらいこのレストポイントに留まっていた。パンプは半分くらいしか抜けていないが、もうこれ以上の回復は望めないだろう。揺らぎかけた覚悟をもう一度決め直す。

レストポイントを離れ、最後の右上するパートに入る。初めの二、三手ですぐに肘が上がってきた。あと少し、もう少しだけもってくれ！あと四手。左手のカチを死に物狂いで握り窮屈なムーヴで右手を縦カチに出す。左の肘はもう完全に上がっていて、しっかり引きつけられない。中継を入れて掛りのいい縦カチを取ったとき、身体が壁から剥がされかけた。この一瞬、生きた心地がしなかった。でも、止まっていた。あと二手。左手を真上の水平カチへ。そして右手を最後のガバへ伸ばす。

掴むと同時に叫んでいた。頭を強く振って、一声思い切り吠えた。するとゴツン、と衝撃があった。叫んで剥きだした歯が岩にぶつかったらしい。舌で触ると、前歯が一本欠けている。しかし、もうそれどころではなかった。あまりに興奮していて、午前中に何度も試行錯誤して決めたガバからの部分も、結局どのようにして抜けたのか覚えていない。

岩の上で何度も何度も、声が枯れるまで叫ぶだろうと思っていた。しかしそれは間違いで、実際はもう一声叫んだだけ。それからは叫ぶことすら出来なかった。岩の上をフラフラと歩きまわって、岩から少し離れた所で小躍りしながら絶叫している二人に手を振った。そして肩で息をしながら蹲り、やっとのことで一言絞り出した。

「歯あ、欠けた・・・ハハ・・・」

日が沈み、風が強く吹き始めた。巻き上げてあったロープは下に落とし、ヌンチャクを回収して下降路のスラブに向かう。完全に燃え尽きてしまったらしく、手には力が入らず、足下もぼんやりしてよく見えない。何度となく登り降りしたはずのスラブが、いつになく恐ろしく感じた。

慎重にクライムダウンを終え、地面に降り立つと笠原さんが待っていた。

「やっちまったなー！すげー！」

強く背中を叩かれる。その痛みで、なんだか安心した。福ちゃんもやってきた。

「おつかれー」

妙に落ち着いてそう言う福ちゃんと拳を突き合わせ、抱き合った。その背中を、笠原さんがもう一度叩く。

Grandpa Peabodyの上で人が叫んでいるというのは、見た人に相当な印象を与えるらしく、興奮冷めやらぬまま帰る支度をしていると、岩場にいたクライマーたちが何人かこちらへやってきた。皆口々に「スゴイ」とか「信じられない」とか言って笑っていた。何日か前に Wilson's で会って話したフランス人夫妻もやってきた。

「これまでいろんなクライミングヒーローがいたけど、今の僕のヒーローはキミだよ」  
ご主人の方がそう言ってくれた。

ウルトラマンのポーズを夢中になって真似したところから十数年。僕は初めてヒーローになった。



<This Side of Paradise (楽園のこちら側) >

Bishop へ行くに当たり、Ambrosia 以外に気になる課題がもう 1 本あった。This Side of Paradise だ。最終目標は Ambrosia に決めていたけれど、その成否には関係なく、この課題は登っておきたかった。しかし Buttermilk でのクライミングのほとんどを Ambrosia に費やしてしまったため、偵察を除いて一日しか行けなかった。



2 月 22 日。今ツアーで一番暑い日だった。レスト明けで張り切って Buttermilks に向かったものの、気温が高すぎるので Ambrosia は夕方少しだけやることにして、易しい課題を何本か登っていた。しかしあまりに暑いのでやる気がなくなり、「暑い〜」「ヌメる〜」とぼやいている他の二人を残して、一人で散

**This Side of Paradise** 光と影の境目を真っすぐ登る 歩がてら This Side of Paradise の偵察に行くことにした。この課題がある Bardini Boulder は、Buttermilks のメインエリアからダート

を 5 分ほど詰めたところから歩いて 20 分くらいのエリアにある。ガイドブックの説明を頼りに、なんとか Bardini boulder に辿りついた。これもとにかく大きかった。トップまでが、高い所で 13 メートルくらい。どの面も前傾していて、威圧的だった。This Side of Paradise はこの巨大なボルダーの大きく最も傾斜の強いカンテ<sup>xv</sup>を一直線に登る美しいラインで、向き合って改めて「これを登らずには帰れない」と思った。課題全体は 12 メートルほど。8 メートルほどのところで傾斜が落ち、そこから上はスラブになっている。恐らくその傾斜の変わる辺りが核心になる。これは Ambrosia の核心の終わりよりも高い。下地は平らな砂地で、その点だけは安心できた。

Bishop の 10 メートルを超えるような課題は岩の上にトップロープ用のボルトが打ってあることが多く、Ambrosia もこれもそうだった。Ambrosia はその危険度が半端ではないし、とにかく「登りたい」という気持ちが強かったので、迷わずボルトを使ってリハーサルをした。しかしこの課題は Ambrosia を登った後ということもあり、「よりよいスタイルで登りたい」と感じた。ボルトを使わない、リハーサルもしない、最もシンプルなスタイル。グラウンドアップだ。

3 月 5 日。皆で Bardini Boulder へ行く。初めてこの岩を見る二人は、やはり興奮していた。双眼鏡を使って、微妙にチョークの跡が残っているホールドを観察する。見たところ、ホールドの掛りは良さそうだが、一手一手遠そうだ。

最初のトライは一撃を狙って取り付いたものの、すぐにビビり、核心までも行かずに飛び降りた。続く 2 回目は核心まで行ったものの、思っていたよりホールドが悪く、またビビって降りた。一緒にトライしている笠原さんも未体験の高度感に体が縮こまり、思うように動けず苦労しているらしい。見た目以上にホールドが遠く、傾斜もある。気合を入れ

て望んだ3回目はその核心を越え、リップ<sup>xvi</sup>のよく掛るカチを掴んだ。しかしまだ終わりではない。頭上につるつるの外傾したカチがひとつ。意を決して左手を出し、その掛りの悪さにまたもやビビる。パンプで動けなくなるまで粘ったものの、試したムーヴがことごとく外れ、仕方なく手を放して飛び降りた。今まで感じたことも無い滞空時間。脇の下に微妙に空気を孕んだような感覚がした。4枚重ねたマットの上に着地し、思わず笠原さんと顔を見合わせ「怖えーっ！」と笑ってしまった。ビデオを撮っている福ちゃんが「ヤバイねー」と呆れたように言う。

しかし、僕も笠原さんもトライをやめようとしめない。笠原さんが慎重に取り付き、核心に差し掛かる。右手で掛りの悪いカチを握り、カンテにヒールフック<sup>xvii</sup>を掛ける。そしてリップの上にあるカチへ手を伸ばす。リーチ一杯で掴んだ。僕がビビったカチに右手を出し、恐ろしげなハイステップで次のホールドを取った。これだ！ムーヴの正解が分かった。笠原さんがリップの上に立って「もう安心」と思った所で強い風が吹いてきた。僕が上に気を取られていた一瞬のうちに、積み上げたマットが二枚飛ばされていった。僕が慌てて拾いに走る間、笠原さんはスラブに蟬のようにへばりついて風を凌いでいたようだ。幸い強風はすぐに止み、最後のスラブを慎重にこなしてトップアウト。拳を突き上げ、笠原さんは足取り軽く岩の向こうに消えていった。

ムーヴが分かっただけじゃこっちのものだ。ここまでの日々で鍛えられた精神力で怖さを押し殺し、僕もすぐに続くことが出来た。



1手1手遠い中間部 核心はまだ上だ

今回のツアーで最大の成果は言うまでもなく **Ambrosia** だった。しかし、スタイルのことを考えると、ちょっとズルをした。**Ambrosia** では出来なかった、理想のスタイルを追い求めること。それが **This Side of Paradise** 出来た。グレードこそ **V10** だが、この課題をグラウンドアップで登れたことはこの上なく刺激的な経験で、ツアーのもうひとつのハイライトだったと思っている。

<最後の一日>

**This Side of Paradise** を登った日の夕方、**the Mandala** の岩へ行った。Josh に「**the Mandala sit** (シットスタート) をやらないか」と誘われていたのだ。**The Mandala** は立ってスタートして **V12**、シットスタートでそれにもう四手追加して **V14** になる。鋭いカチを繋いで、**the Mandala** に合流する部分でダイナミックな確率の低いムーヴがあり、そこから **V12** に突入する。初めは下のパートをこなしてから **the Mandala** を登るなんて、とても出来る気がしなかったが、やってみると思ったよりも感触がよかった。この日の終わりにはほとんどのムーヴを解決して、「もしかしたら登れてしまうかも」と感じるようになっていた。

ツアー最終日の3月8日。この日も快晴。気温は低めで、風が吹いていた。いいコンディションだ。「これで最後になるなー」と言いながら **Buttermilks** へ車を走らせた。

「9時に **the Mandala** の前で」

Josh とはそう約束していた。アップを手早く済ませ、**the Mandala** へ向かう。この日の **the Mandala** は賑わっていた。Josh はじめ、強いクライマーが何人も集まっていた、中には **The Mandala** を数回で登ってしまう人もいた。僕は **The Mandala** を途中まで登ってムーヴを確認した。感触はそれまでで一番よかった。続いて、シットスタートから繋げてやってみる。数回で合流部分のダイナミックな一手が止まった。そのトライは **the Mandala** の一手目で落ちたものの、「これは、登れてしまうかもしれない」と感じるには十分だった。「惜しいなー。もう登れそうじゃないか！」

一緒にトライしている Josh がそう言って笑った。

10分くらいレストして、シューズを履く。集中力が高まっていく。もう登ってしまうつもりだった。痛み始めた指先に力を込めて、一手一手慎重にこなす。そして問題の部分。右手をリーチ一杯に伸ばしたところから右足を小さなエッジに送って、そのまま左手をダイナミックに寄せて・・・

そのとき、右足が滑った。派手にすっぽ抜けた。そしてつま先が下に向いたまま、敷き詰められたマットの上に着地した。「ぐにゃっ」という嫌な感触。右足首に鋭い痛みが走った。立ち上がれず、這ってマットの上から降りる。気持ちよく始まった最終日の終わりは、あまりに呆気なく、ほんの一瞬だった。

自分の荷物の所まで片足跳びで戻り、座り込む。直前に足を軽く捻って休憩がてらビデオを撮っていた笠原さんが駆け寄ってきた。急いでシューズを脱いで、せめて軽く動かす

ことくらいは出来ないかとやってみるものの、ほとんど動かさなかった。派手に顔をしかめ、頭を抱えた。

「I broke my ankle. 足首、やっちゃったよ」

どこかへ散歩に行っていた Josh が帰ってきたので、そう声をかけた。Josh はすぐに彼女の Regan を呼んで、僕の足首を見せた。彼女は医療の知識があるらしい。周りにいたクライマーたちに声をかけ、一人から何やらもらってきた。

「これを飲んでおくといいわよ」

そう言って、青い錠剤を差し出してくれた。

もう登れないことは明白だったので、車に戻って近くの小川へ足首を冷やしに行くことにした。

「歩けるか?」「無理」

「よし、掴まれ」

そう言って、Josh は駐車場まで肩を貸してくれた。と言っても、驚くほど太くゴツイ彼の肩に、僕はほとんどぶら下がっていた。

「Ambrosia みたいなヤバイ課題で無傷だったのに、こんな低い課題で怪我するなんてな。可笑しなもんだ」

「指は動かせるか? 指が動くってことは良いサインだ。川に着くまでは出来るだけ高く揚げとけ」

彼も以前酷い捻挫をやったことがあるらしく、いろいろとアドバイスをくれて、それから仲間のところへ戻っていった。笠原さんに呼ばれて別の岩から戻ってきた福ちゃんには、最終日を無駄にさせては悪いので、マットをドサドサと預け、また夕方に落ち合うことにした。

笠原さんの運転で小川に向かう間に少しだけ落ち着いた。水辺までは肩を借りながら下り、流れに足を突っ込むと、冷たすぎて1分とつけていられなかった。辺りを見てみると、小川に渡してある丸木橋に氷柱が垂れていた。冷たいわけだ。冷たいやら情けないやらで、なんだかおかしくなって笑ってしまった。

「最終日でよかったね」

笠原さんと二人で冷たさに悶絶しながら、そんなポジティブなことも言えるようになっていた。

安静にするために、二人で一度モーテルに帰ることにした。駐車場まで戻ると、一緒に The Mandala をトライしていたクライマーが居たので挨拶した。

「大丈夫か?」

苦笑いしながらそう聞かれたので、足首を指差して「終わったよ」と応えた。

「プレゼントだ。これで冷やしとけよ」

彼はそう言って、持っていた缶ビールを窓から突っ込んでくれた。



ため息交じりに車に揺られていると、Buttermilks のダートから舗装された道に出る所  
にある一時停止の標識が目に入った。八角形の赤い標識の『STOP』という白文字の上下に、  
太い黒のマジックで『Never』『Climbing』と落書きしてあった。

『Never Stop Climbing』「登るのをやめるなよ」

それまで全く気がつかなかった。思えば、毎日暗くなるまで登っていたから当然だ。

「やめてたまるかー！」

Bishop の町へと下っていく車の窓から叫んでみた。

モーテルに帰ってからは、氷でアイシングしながら不貞寝していた。することもなくベ  
ッドの上で残りの半日近くを過ごした。でも、流石にこのまま帰るのは心残りが多すぎる。  
日が傾いたころ、福ちゃんを迎えに行くついでにもう一度 Buttermilks に行くことにした。

「Checkerboard、登ってきたよ！」

三人分のマットを一人で担ぎ、荷物を満載されたロバのような格好をした福ちゃんはニコ  
ニコしながらそう言った。偶然近くで登っていた Josh と Regan もやってきた。

「どうだ？」

「自力じゃ歩けないけど、仕方ないからこのまま日本に帰るよ」

「The Mandala、残念だったな。またトライシに来ればいいさ」

皆で記念写真を撮って、Josh がそう言った。

そうだ。また来よう。

「I'll be back!」

岩の方を指さして叫ぶと、Josh は一瞬間をおいてニヤリとしていた。



左から 福ちゃん 笠原さん 僕 Josh と Regan Thank you, guys!



## 会計報告

渡航費（燃油サーチャージ込み）	89,810 円
国内移動費（タクシー）	21,000 円
レンタカー（1台 88,000 円）	29,300 円
ガス代	11,000 円
食費	24,100 円
宿泊費（キャンプ場）	2880 円
宿泊費（モーテル）（全体 43,036 円）	14,345 円
その他雑費（外食、ギアの購入、お土産など）	93,525 円
合計	267,060 円

\*1 ドル=80 円で計算

## おわりに

夢のような日々を終えて、僕に残ったものは主に3つ。①「右足首の怪我」 ②「クライマーとのつながり」そして、③「欠けた前歯」。

右足首は帰国後すぐに整形外科に行き、診察を受けました。幸い靭帯断裂や関節の損傷といったことにはなっておらず、典型的な捻挫、ということでした。その後1週間ほどで普通に歩けるようになり、「それならば」ということで3月の末には鹿島槍北壁の登攀にも計画通り臨みました（結果は豪雪のため敗退でしたが）。

4月にジムで登っていてもう一度捻ってしまいました。幸い大事には至らず、その後は順調に回復、現在はクライミングや登山にも支障がない程度になりました。ただし足首の可動域は狭まり、無理もきかなくなりました。故障してから既に5カ月過ぎた今でも、まだふとした瞬間に痛むことがあります。あと半年は注意が必要でしょう。

今回ツアーに行ったことで、国内外に新しくクライマーの友人が出来ました。福田君とはその後頻繁にやり取りをし、互いに「一緒に登りに行こう」「今度、こっちに遊びにこいよ」と誘いあっていますし、現地で知り合った日本人クライマーとも帰国後一緒に登りました。Josh、Regan、その他あちらで一緒に登ったクライマーとは、今でもインターネット上で互いの近況を報告しあっています。

こうした旅の醍醐味のひとつは、様々なコネクションが生まれることでしょう。クライミングの成果とはまた違う、僕の財産です。

最後に、欠けた前歯。これは治療せず、今もそのままにしてあります。

Ambrosia を登った興奮が冷めてから、「痛んだら歯医者にいこうか」程度に考えていましたが、結局その後、欠けた部分が痛むことはありませんでした。食事にも全く支障はなく、アメリカの大きなハンバーガーに遠慮なくかぶりつけるくらいでした。

しかし、治療しなかった理由はもうひとつあります。これが、僕が Ambrosia を登った何よりの証明であり、そして勲章のように思えるからです。Ambrosia を登った翌朝、「夢だったのでは」と思えるくらい信じられなかった前日のことが、欠けた前歯に触れることで現実だと実感できたのです。今はもう角が取れて大分丸くなりましたが、欠けた跡を舌先でなぞる度に、あの日のことが鮮明に思い出されます。

登れなかった課題、取り付かなかった課題、その他沢山の課題が Bishop にはあります。いずれまた近い将来、それらを登りに再訪しようと考えています。そのときは Grandpa Peabody の前に立って、欠けた前歯をなぞってしまうのでしょうか。あの茶色い壁の天辺にぶら下がり、絶叫しているあの日の自分を思い描きながら。



『Never Stop Climbing!』

\*脚注\*

- 
- i グレード・・・クライミングの難易度。クライミングの種類や国・地域によって方式が異なる。アメリカではボルダリングのグレードをアルファベットの「V」と数字を組み合わせた表し方をする。0から数字が大きくなるほど難しく、現在、世界最難はV16である。ちなみに日本ではこれを「級」と「段」で表しており、10級から降順で難易度が上がり、1級より上は初段、二段と昇順になる。
  - ii ホールド・・・手掛かり、足掛かりのこと。区別するために、手掛かりのことを「ホールド」と呼び、足掛かりは「フットホールド」もしくは「スタンス」と呼ぶことが多い。
  - iii カチ・・・ホールドのひとつ。小さく角の立ったエッジ、および指を立ててそれを保持することを言う。
  - iv チョークバッグ・・・滑り止めの粉（チョーク）を入れておく袋。腰に着けることもできる。
  - v フレーク・・・ホールドのひとつ。ヒレのような形をした岩の割れ目。
  - vi ハイボルダー・・・高く、危険が伴うボルダー、およびそこにある課題のこと。高さの基準は特にないが、ここではおおよそ6メートル以上あればハイボルダーとみなされるらしい。
  - vii トラッドクライミング・・・ボルトに頼らず、ナチュラルプロテクションのみを支点にして登るフリークライミングのスタイル。そのため、ランナウトや不安定なプロテクションでの登攀を余儀なくされることが多く危険度が高い。
  - viii 5.13a・・・「デシマルグレード」という。ロープを使ったフリークライミングのグレードとして採用されている。「5」がクライミングを表し、「13」の部分が0から始まり大きくなるほど難しい。「a」の部分はa、b、c、dの四つを用いてより細分化して表している。A→b→c→dの順で難しさが増し、その次は数字がひとつ上になる。つまり、5.11c→5.11d→5.12a→5.12b・・・という具合になる。
  - ix トップロープ・・・上の支点からロープを垂らし、ビレイヤーがクライマーを引っ張り上げる形でビレイして登ること（フォローとは異なる）。クライマーの墜落が少なく、中間支点をとる必要もないので、主に初心者クライミングや危険が伴うルートの練習に用いられる。
  - x ムーヴ・・・クライミングの動き。
  - xi ピンチ・・・ホールドのひとつ。親指とそれ以外の4本で挟むように持つ。
  - xii フェコ・・・ホールドのひとつ。風化して出来た浅い穴のこと。
  - xiii パンプ・・・前腕に乳酸が溜まり、力が入らなくなること。
  - xiv ガバ・・・ホールドのひとつ。握るように持てる、掛りのいいホールドのこと。
  - xv カンテ・・・岩の角。リッジに近い。
  
  - xvi リップ・・・岩のへり。
  - xvii ヒールフック・・・ムーヴのひとつ。踵を引っかけて支えにすること。